

## ペルガモン美術館とプラハ 工芸美術館を訪ねて

町田市立博物館

学芸員 川松 康人

昨秋のヨーロッパは、例年よりも暖かいということ  
で、日中ジャンパーを着ていると、汗ばむほどであっ  
た。天候に恵まれながら旅は続いた。今日からいよいよ  
東欧入りである。西ベルリンから電車で東ベルリン  
に入るが、ペルガモン美術館のあるフリードリッヒ・  
シュトラッセ駅に近づくと、高い有刺鉄線の金網が見  
え始める。やがて四角いコンクリートの高い監視塔も  
姿を現わし、東西ドイツの壁をいやおう無しに見せつ  
けられる。入ったら二度と帰れないのではないかと、  
不安がよぎったりする。まもなく電車は2階のホーム  
に到着した。階段を降りると1人がやっと通れるほど  
のゲートで、パスポートのチェックを受け、そこで1  
日観光ビザの認印をパスポートに押してもらい外に出  
た。ラダと言うソ連製の車が目につく。年式はかなり  
古そうに見えた。ペルガモン美術館へ行く前に、チェ  
コスロヴァキアとハンガリーの入国ビザをもらうため  
に両大使館へ行くが、チェコは大使不在で3日後再び  
訪れることになった。

東西ベルリンを貫流するシュプレー川に沿って歩き  
ペルガモン美術館へ行く。ペルガモン美術館はベルリ  
ン美術館とも呼ばれ、シュプレー川の中州にあり、こ  
こは美術館島とも言われている。川面に映える美術館  
の外壁は黒く焼け焦げ、第2次世界大戦の傷あとが今  
も生々しく残る。崩れ落ちた一角を修理し、正面玄関  
として近代的にここだけ建て替えてある(写真)。

2マルク(約185円)の入館料を払い中に入った。  
今回は、ヨーロッパのガラス工芸品を見ることに主眼  
を置いていたので、ともあれガラスを見つけることが  
先決であった。とにかくヨーロッパの美術館は大変大  
きいので、はじからゆっくり見て行こうなどと思っ  
たら、何日かかるかわからないのである。ガラスの展  
示品は入口右手のエジプト室にあり、すぐ見つけるこ  
とができたが、たった1ケースに展示されていただけ  
であったが、内を見てびっくりした。B.C.1,500年と  
書かれたガラス器があった。最古に属するガラス器で、  
日本では見られないものである。

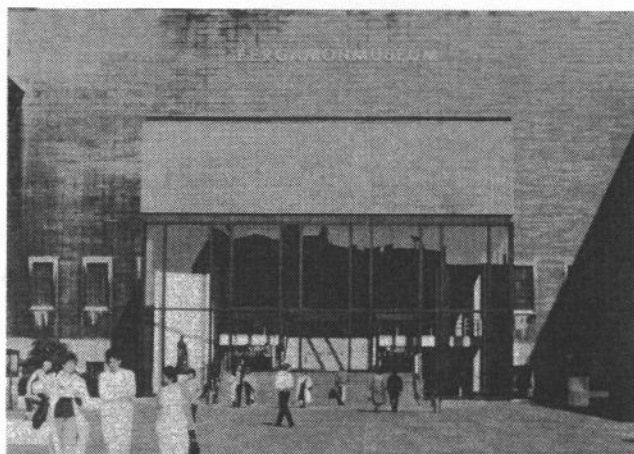
この頃のガラスはコア・グラスと呼ばれ、不透明の  
ガラスを使い、耐火粘土で作った内型の上に螺旋状に  
ガラスをまいて作る技法で、メソポタミアとエジプト

で作られていた。用途は、香料や美顔料を入れるため  
の容器と考えられているが、死者への副葬品にも使わ  
れていた。もちろん庶民の持物ではなかった。このコ  
ア・グラスは、黒褐色の素地に、小さな円形の白いガ  
ラスを被せ、その上にさらに赤いガラスを被せ、まる  
で全体が水玉文様のように素地に象嵌されており、ト  
ンボ玉に見られる技法が使われている。初めて見る手  
法のコア・グラスであった。もう二度とお目にかかれ  
ないと思い、一生懸命になってカメラのシャッターを  
押した。フラッシュは禁止だが、自由に撮らせてくれ  
るので大変ありがたかった。私が歩いたヨーロッパの  
ミュージアムは、みなそうであった。

ペルガモン美術館では、ガラス器の展示数は少なか  
ったものの、十分な手ごたえを感じることができた。

大展示場には、19世紀後半ドイツ人技師によって、  
エーゲ海に臨むトルコ西端で発掘されたペルガモン大  
祭壇(B.C.180~B.C.160)が、見事なまでに復原  
展示されていた。これが美術館の名称になっているの  
である。大祭壇を飾るギリシャの神々と、野卑で乱暴  
なギガンテスとの戦いをあらわした浮彫りは、ヘレニ  
ズム美術の特性をよく発揮した、代表的作品であると  
言われている。またバビロンのイシュタル門を見上げ、  
あまりの大きさと美しさに見とれ、しばし茫然と立ち  
止まっていた。まさに「壮麗」と言う言葉がぴたりと  
あてはまる見事さであった。

夕方、ペルガモン美術館を後にして、ホテルのある



ペルガモン美術館

西ベルリンへもどった。

翌日から2日間は、西ベルリンにあるダーレム国立博物館、エジプト博物館、古代博物館、工芸美術館などを精力的にまわった。それぞれの館によってガラス器の展示には特色があり、ダーレム国立博物館は、ササン・ガラスとイスラム・ガラス、エジプト博物館はコア・ガラス、古代博物館には、ローマン・ガラスの優品があった。工芸美術館は、17～18世紀にかけて、ドイツ及びポーランドで作られた、フンペン・ガラスやグラヴィールゴブレットなどの魅力的な作品があった。

次の日、東ベルリンへ行き、チェコスロヴァキア大使館でビザを受取り、レンタカーで一路プラハに向った。東ドイツの国境を抜けて、チェコに入ったのは夜8時を過ぎていた。国境のホテルで一泊し翌朝出発した。途中田園風景をながめながら走っていると、道端でおばあさんがリヤカーに積んだ野菜を売っていた。トマト、ニンジン、カリフラワー、リンゴなどであった。おばあさんの小遣稼に協力しようと、リンゴを買って食べてみたが、かなりすっぱかった。

そうこうするうちに、いよいよプラハに入った。プラハの町は中世そのもので、ゴシックやバロックの建物がたち並ぶ美しい町であった。神聖ローマ帝国皇帝カレル4世(1,346～78)やルドルフ2世(1,576～1,612)が、首都をプラハに置いたため、政治、経済、文化の中心地として繁栄したからである。宮廷ガラス工房があったプラハ城もそびえ立っている。手前にはヴァルタバ川が流れ、カレル4世が作った有名なカレル橋がかかっている。

カレル橋から歩いて6分ほどのところに、これから訪ねるプラハ工芸美術館がある。大きな看板などはなく、ちょっとわかりにくかった。これも町の美観をそこなわないようにとの配慮からなのであろう。

プラハ工芸美術館には、約2万点

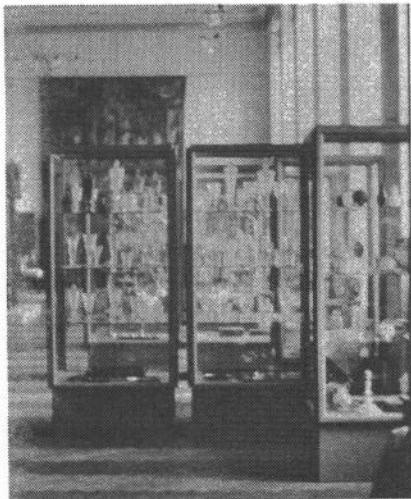
にもものぼるガラス器が収蔵されている。館内を案内して下さったのは、オルガ・ドラホトヴァー女史である。同女史は『ヨーロッパのガラス』を著わし、近く日本で翻訳本が出版される予定である。展示会場のケースの中は、17～20世紀にかけてのポーリアン・ガラスがところ狭しと並んでいる(写真)。町田市立博物館には、まだ収蔵されていない、17世紀のエナメル彩フンペン・ガラスや18世紀のゴールド・サンドウィッチ・ガラスが輝きを放っていた。ゴールド・サンドウィッチ・ガラスは、ガラスとガラスの間に金箔をはさんだ特殊な技法で作られ、B.C. 3世紀頃の作品がイタリアで発見されているが、その後間もなく断絶してしまった技法である。18世紀にポーランドで再興したが、18世紀末から19世紀初めには再び消滅してしまった。19世紀に入るとポーランドでは、色とりどりのカラフルな作品が作られ、展示場も19世紀のコーナーは華やかそのものである。その中で特に目を引くのは、ベネチアのレース・ガラスの手法で作られた作品である。レース・ガラスは16世紀末にベネチアで開発された新しい技法で、その後スペインなどへ広がっていった。

同館では、3階が収蔵庫になっており、ドラホトヴァー女史のご好意により、見せていただくことができた。収蔵庫内の棚には、ポーリアン・ガラスがぎっしりと並んでいた。地震の多い日本では、とてもまねのできない収蔵方法である。また以前から真贋問題で気になっていたのが、17世紀のエナメル彩フンペン・ガラス(大形の円筒杯)と19世紀に似せて作られた贋物について、日本では比較検討するすべもなかったが、それがここでは1つの棚にそれぞれきちんと別けて収蔵されており、両者を同時に見られたことは、この上もない喜びであった。

同館は、チェコの現代ガラス作家の作品も定期的に購入しており、伝統あるポーリアン・ガラスの美術館として、今後さらに充実して行くことであろう。

翌日は、館長のダグマル・ヘイドヴァー博士にも、お会いすることができた。

最後になりましたが、ご多忙中にもかかわらず種々ご教示賜りましたダグマル・ヘイドヴァー博士ならびにオルガ・ドラホトヴァー女史に対して、深く感謝申し上げます。



プラハ工芸美術館のガラス展示

## 八王子地域史研究会について

最近、各市町村において多くの博物館が新設され、その活発な活動を通じて、社会教育の推進に大きな役割を果たしている。しかしこうした半面、近隣に所在する博物館では、活動が似かよったものになり、それ

## 八王子市郷土資料館

細谷 勘 資

その独自性が失われつつあるのも事実である。

地域博物館の持つ役割を地域においていかに機能させていくか、これは以前より出されている問題であるが、今だに十分な議論がなされていない。

この古く新しい問題は、博物館の存在意義そのものを考えることであり、博物館建設の盛んな今日こそ、確固たる姿勢をもって取り組む必要があると思われる。

それでは本来あるべき地域博物館の独自性とは何かということになるが、それは一つは各館それぞれの地域史研究の成果のなかから生み出されるといってよからう。八王子市郷土資料館では、このような認識のもと、昨年より職員らが中心となって、『八王子郷土史研究会』と称した地域史の勉強会を行っている。「地域博物館における地域の研究課題 ～地域史に基づく展示・教育活動の前提として～」という共通テーマを設け、毎月一回のペースで研究会を開いているが、八王子を中心とした地域史を豊かにするためには、これまでの研究状況を整理して明確にすることがまず必要であるということから、メンバー各々の専門分野における課題を整理することから始めている。

研究会は昨年4月より今年3月まで、八王子市郷土資料館内にて（午後5時～7時）、これまでに計12回行われているが、報告テーマおよび報告者は次に記す通りである。

- \* 4月 「甲野勇と地域博物館」（土井）
- \* 5月 「学制下の学校運営に関する諸問題」（伊藤）
- \* 6月 「土平治騒動について」（日露野）
- \* 7月 「日野宿組合村における助郷惣代制」（米崎）
- \* 8月 「武蔵国船木田荘の伝領関係」（細谷）
- \* 9月 「八王子城と市と町について」（土井）
- \* 10月 「江戸時代の八王子の人口について」（光石）
- \* 11月 「八王子千人同心の変質について」（野口）
- \* 12月 「甲州道中の中馬と稼ぎ馬」（鈴木）
- \* 1月 「東京都・多摩地方のミタマノメシ」（佐藤）
- \* 2月 「都社会教育研究奨励事業と研究会」（細谷）
- \* 3月 「浅川流域の水神信仰」（秋間）

多忙なメンバーが、その時間をさいて、研究会に参加することは、なかなか苦勞が多く、確かに難しいものとなっている。しかしこれを続け、そこでの活発な討論を通じて、各々が将来あるべき地域博物館をイメージし、現在山積みされているいくつもの課題に十分応

える力量をたかめていくことができれば、研究会を行っていく意義も確かめられるというものである。

さて、ここで一年間の研究会の成果を評価するならば、各専門の現時点における課題を整理する機会になったということ、まずは報告者の今後の研究にとり大いに有益なものであったと思われる。また、課題の抽出は、単にその報告者の収穫となるばかりでなく、専門領域の異なる者にとっても、自分の専門とする分野に少なからず益するところがあった。地域史における問題を、広く全体の関心事として考えることは、地域博物館にとって必要欠かさざることといえよう。

こうした研究成果を共有財産として蓄積していくことは、結果的に博物館の展示・教育活動など多方面にわたる分野に反映されなければ意味がない。しかしながら、この評価はわずか1年のみで出すものではなく、各年の成果の積み重ねの上にとって始めてその真価が問われるものでもある。地域のなかで博物館をどう位置付けていくか、そのためには一時的なものではなく、長期的な視野をもった活動を行い、その評価をしていく必要があると思われる。現時点ではともあれ、各分野における報告内容を提示することによって、問題の所在を多少なりとも明らかにしえたことを積極的に評価し、今後の模索のための緒口とするにとどめておくべきだろう。

最後になったが、東京都は区市町村教育委員会に所属する社会教育関係職員の資質の向上のために行う自主研究グループの活動に対し助成をはかるとともにその成果を社会教育行政の推進に役立てるという目的により、社会教育研究奨励事業を実施している。私達は研究会を始めるにあたり、良い機会と考え、昨年度これに申請し、その対象グループとなったが、このことは会の運営に様々な意味で刺激を与えるものとなった。

研究会のあらましについては、以上述べた通りであるが、本年度もこうした会を行い、今後の継続的な研究につなげていきたいと考えている。

## 学習会の企画から自主サークル の結成まで

—植物画教室の場合—

福生市郷土資料室

主事 宮 林 一 昭

福生市郷土資料室では、地域の文化財や自然への理解と関心を育むため、各種の教育普及活動を行っている。これらにはある程度の期間継続する学習会形式のものとして1回完結のものがあり、62年度において、前者については毎年継続して行っている初心者及び上級者向古文書学習会、そして62年度より新たに始める初心者向植物画教室の2講座であり、私が62年4月入職以来初めての担当講座として、植物画教室を受け持つこ

ととなった。

多くの自治体資料館及び博物館同様、当資料室でも職員、特に学芸員不足の現状にあり、この結果として主催する学習会も、少ない学芸員の各専門分野に限定されがちであった。しかし、これは常々反省されていたことであり、この現状を改善する意味から、自然科学系の学習会を開催する方針を立てた。テーマの選定にあたってはいくつかの候補を選んだが、上司の勧め

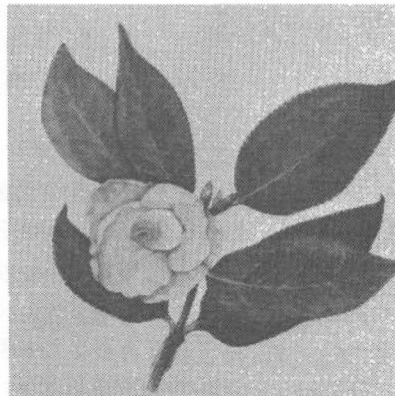


学習会風景

で植物画に決定した。植物画とは様々な植物を、科学的視野に基づき極めて写実的に描くものであり、多摩川流域を除けば他にまとまった自然環境のない当市においては、身近な植物に関心が向くようになるであろう植物画は、自然保護への理解を育むテーマとしてはうってつけである。

学習会の日程は、11月12日より12月10日までの毎週木曜日に連続で5回、午前10時より正午までとし、講師は日本園芸協会委員・日本ボタニカルアート会員の佐藤廣喜氏にお願いした。参加者の募集については婦人を対象とし、市広報、市内各所へのポスター掲示、そして西多摩地区の地域へ紹介を依頼した。学習会を開催するにあたって毎度頭の痛いのは参加希望者の少ない事であり、今回も心配していたのだが、意外にも申し込み受付初日で定員20名はあっさりと埋ってしまった。結局、初日に申し込んだ24名に参加してもらう事となり、学習会初日を迎える。年齢層は20代後半より60代前半までとかなり広いが、40代が主流を占め、絵の経験はゼロに近い方が大部分である。とりあえず着色はせず、初日はえんぴつのスケッチのみで終わったが、正直なところ、かなりの不安を感じる作品が少なかった。2回目から着色に入るが作品の出来は前回同様である。内心この学習会は全5回終了時には何名も残らないのではと不安になる。当資料室としては学習会終了後は自主サークルとして継続させ、自然保護に向けての様々な活動や、企画展・

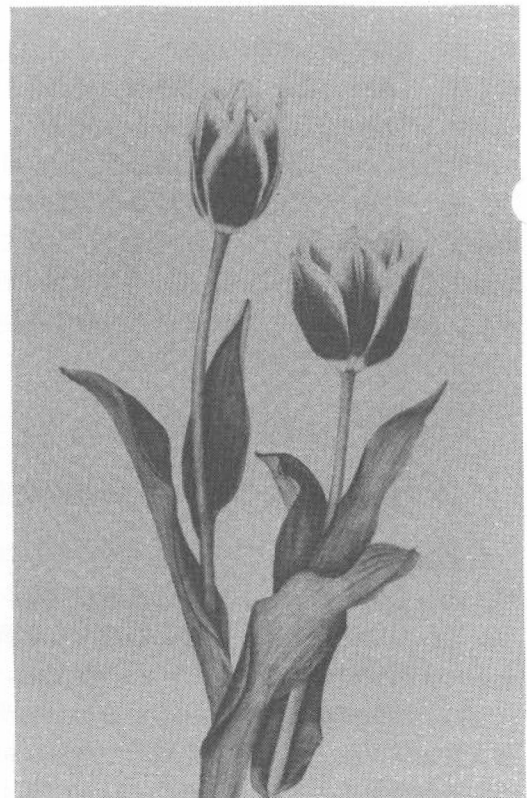
出版物に対する助力など、多くの期待を持っていただけになおさらである。しかし3回目以降、驚いた事に、着色する楽しさを覚えたらしく、また佐藤先生の親切的な指導も手伝ってか、多くの参加者が自主的に何枚もの作品を1週間の間に描き、先生の指導を乞うようになったのである。結局この意欲が功を奏し、技術的にかなりの進歩をとげ、



参加者の作品「ツバキ」

落後者もほとんどないままに最終回を迎えた。ただし、この時点で自主サークルを発足させるにはまだ技術面に今一步の感があり、更に5回学習会の延長を企画、参加者に諮ったところ、全員が積極的であった。予算の関係で5回中3回しか講師を招けなかったものの、あいかわらず出席率は高く、技術は飛躍的と言って良い程に向上、佐藤先生からも全国植物画コンクールへの出品を勧められるまでになった。最終回には自主サークルの結成を提案、出席者全員の賛成を得、1週間後にそのための会議を開き、全参加者24名中13名をメンバーとして植物画サークル「SASAの会」が発足した。会の名称「SASA」とは講師の佐藤先生の「佐」と福生市の「生」を一文字ずつ取った。活動はとりあえず2週間に一度、木曜日に当資料室に集まり、また4回に一度は会費からの賄いで、引き続き佐藤先生に指導をお願いする事となり、3月31日には佐藤先生を交え、近隣の市まで自生しているカタクリの花を描くために足を伸した。

今後の予定として、当資料室サイドでは市内の野草を描いてもらい、この作品をメインに企画を開けたらなどと考えているが、今日でもメンバーの向上心は止まるところを知らず、これら担当者の計画以上に色々画策しているようで、私もかなりこの勢いに押され気味ではあるが、「SASAの会」が力強く第一歩を踏み出した事に、まず間違いはなさそうである。



参加者の作品「チューリップ」

## 〔昭和62年度展示活動報告〕

館名	展示会名	期間	内容
五日市町郷土館	五日市の縄文人	(常設展) 62. 8～	都道32号線道路拡幅工事にともなう発掘調査(昭和60年7月～62年1月)の結果出土した埋蔵文化財を中心に、縄文中期の生活や交流圏を示す展示。
	五日市付近の野鳥	(常設展) 62. 8～	バードカービングを使って、五日市周辺にみられる野鳥20種ほどを展示。
青梅市郷土博物館	収蔵品展	4. 1～9. 15	開館以来、博物館に収蔵してきた各種資料の展示紹介。
	青梅のあけぼの展 (一部展示替)	4. 1～9. 15	市内各地に所在する遺跡から出土した遺物をもとに、青梅の原始・古代を紹介する。
なお、郷土博物館では、館内改修工事および新収蔵庫建設工事のため、9月16日から3月31日まで休館した。			
奥多摩郷土資料館	小河内の郷土芸能 (1階)	62. 4～63. 3	水没した小河内地区に伝承されていた鹿島踊、車人形、獅子舞、神楽を展示、ビデオにより紹介した。小河内の山村生活用具(国指定)と、奥多摩地方の歴史・民俗資料を紹介した。
	収蔵品展 (2階)	(常設展)	
清瀬市郷土博物館 (ギャラリー)	特別展・「小島善太郎代表作品展」	4. 29～5. 17	油絵16点、水彩画3点ほか全25点の代表作品を展示。
	特別展・「山下清一 その生涯と作品展」	8. 22～9. 6	はり絵、油絵等186点の展示。
(民俗展示室)	写真展・わが街清瀬 清瀬美術家展	9. 23～10. 11	市内をモデルにした写真を一般公募し展示。
	生活用具展 昼のくらし・夜のくらし	11. 7～11. 23	市内在住の美術家による彫刻、絵画の展示。
(歴史展示室)	生活用具展 昼のくらし・夜のくらし	2.26～63年度中	清瀬の養蚕に変わり、日常身のまわりで使われている生活用具の展示。
	下宿内山遺跡 発掘調査でわかること	11.1～63年度中	清瀬で使われた庶民の焼物展に変わり、下宿内山遺跡での発掘を通して解ったことや発掘の方法等を展示。
(歴史展示室 ハイケース)	峯尾大休	62. 4～6	多摩が生んだ名僧・峯尾大休の書画の展示。
	全国の陶磁器 富士講法具	62. 7～10 62. 11～63. 3	日本全国有名産地の陶磁器(酒器)の展示。 都指定民俗文化財・富士講の法具の展示。
立川市歴史民俗資料館	特別展 「立川の食生活展」	11. 17～12. 13	縄文時代から昭和に至る、立川の食生活の変遷について、土器や食器、食物サンプル等を展示。
	「郷土の写真家石川 俊雄氏遺作写真展II」	3. 8～4. 10	昨年に引続き、50年にわたって撮影し続けた氏の作品の中から、立川の風景・山とそこに暮す人々等約60点を展示。
	ミニ展示会 「地図にみる立川の 移り変わり」	4. 7～7. 19	江戸時代の古地図から最新の市街図まで、地図による立川の変遷を展示。
	「立川駅の移り変わ りII」	7. 21～8. 2	明治期の水彩画に描かれた立川駅から、駅ビル竣工まで、立川駅の変遷を写真を中心に展示。
	「立川の野草」	8. 4～8. 16	春から夏にかけて、市内で見られる野草を写真で展示(撮影、当館研究員鈴木功氏)。
	「絵でみる立川のわ らべ遊び」	8. 18～8. 30	郷土資料「立川のわらべ遊び・わらべ唄」の原画(早川薫太郎画伯作)のうち、わらべ遊びを中心に展示。
	「立川駅の移り変わ りIII」	1. 31～3. 6	駅ビル建設工事前後を中心に、新旧の駅舎や駅周辺の風景などを写真で展示。
	マユダマ展示	1. 14～1. 27	年中行事のうち、小正月に行なわれるマユダマを玄関ホールに展示。
調布市郷土博物館	歴史展 「調布の通史」	4. 1～6. 30	郷土調布についての理解と認識をより多く深めることを目的とした展示。内容は原始・古代から近代までの調布の歩みをたどり、また近代の調布の農業

東京都高尾自然科学博物館	テーマ展 「化石」	7. 12～9. 6	や多摩川関係の資料、庶民のくらしの道具等を展示し、郷土に生きた人々のくらしの様子を紹介。 地質時代に生息した動植物の化石資料と、その生活環境を複原図化したパネルにより生命の進化を紹介。
	特別展 「多摩の交通今昔」	10. 1～11. 22	交通手段や交通網は政治・産業をはじめ、人々のくらしと密接な関わりを持ち、地域の動脈的な存在である。今回の展示は多摩地域を貫く甲州街道・中央線・京王線などの資料をとおして多摩の交通の変遷と私たちのくらしのかかわりについて紹介。
	歴史展 「調布の通史」 東京の両生・爬虫類	12. 8～3. 31 3. 12～常設	調布の歴史・民俗を、出土遺物、農具、庶民のくらしの道具、模型、写真パネル等により紹介。 当館では、これまで両生類（カエル・サンショウウオ）や爬虫類（ヘビ）については、ホルマリンの液浸標本によって展示してきた。しかし、液浸標本では、色が変わってしまったり、見にくい点もあったため、展示を一新し、剥製およびレプリカによる展示に代えた。今回の展示では、東京で見られるヘビやサンショウウオ、それにカエルの分類展示の他、サンショウウオの卵のうをレプリカにして展示した。また、10年前に東京で発見された新種のカエル（ナガレタゴガエル）の繁殖期の生態を、溪流のジオラマにして展示した。
東京都武蔵野郷土館	企画展「小絵馬―描かれた民間信仰」	11. 22～1. 17	小絵馬約170点を展示し、小絵馬の図柄とこれに託された人々の素朴な願いとの関係を探る。
東京農工大学工学部 附属繊維博物館	特別展 東京農工大学科学技術展'87―第2回東京農工大学先端科学技術展―	6. 25～6. 28	昨年に引続き今年も各方面からの期待に応え、展示テーマの幅も広がり、装いも新たに「東京農工大学科学技術展'87」と銘打って開催し、前年にも増して多くの参加者を得、大成功を納めた。
	特別展 第30回特別展 「絹～紬からニューシルクまで～」	11. 7～11. 15	わが国に古くから伝わる「絹の糸」〈生糸・紬糸・絹紡糸〉の作り方やその製品を紹介する一方、最近のシルクサイエンスの花「ハイブリットシルク」や「形状記憶シルク」等を一堂に展示し、日本人の心にある「絹」について展示、解説、記念特別講演会を開催。
	ミニ展 「藍染干支展」	6. 8～7. 30	若林都茂子氏制作による藍染干支作品30点
	「テキスタイルデザイン展」	10. 2～10. 30	大塚学院生によるコンペ作品50点
	「日本手織機模型展」	11. 5～11. 20	重松成二氏制作による全国各地の伝統的な手織機模型作品30点
	「21世紀の絹展」	11. 7～11. 15	附属繊維工場教官小此木エツ子氏代表（地域交流研究会）による伝統織物展示会20点
	「昭和初期のマッチ商標展」	12. 5～2. 10	中村、亀山コレクション公開 200点
	「サークル作品展」	2. 17～2. 23	博物館に芽生えた生涯学習グループ「サークル」の一年間の活動成果作品展
	「紙による工芸展」	2. 15～3. 31	故牧野画伯の紙彩画他
八王子市郷土資料館	特別展「大久保長安とその時代」	6. 30～8. 9	八王子の町づくりの中心人物とみられ、また、近世初期、江戸幕府成立過程において最も活躍した一人である大久保石見守長安を取り上げて、当時の社会や八王子の役割りについて考えてみる機会とした。佐渡相川町大安寺所蔵の長安木像など展示。
	特別展「八王子と川の文化―その信仰と習俗」	10. 18～11. 22	川と生活のかかわりを通して、あらためて川を持つ役割を探るとともに、浅川水系全域を対象とし、特にそこにみられる水神信仰、雨乞習俗、川の伝承等に視点をあて、水とのふれあいに心を傾けてきた

羽村町郷土博物館	人物コーナー「浮世 絵師 歌川国直」	9. 11～10. 11	郷土の人びとの民俗文化の跡をたどってみた。 八王子で晩年をすごした浮世絵師・歌川国直に焦点をあてた。八王子周辺に残る国直の作品を紹介し、多摩地域に与えた文化的影響を考えてみた。
	企画展 「五月人形展」	5. 1～5. 31	武者人形などの座敷飾りを展示室に展示し、鯉のぼりを旧下田家住宅の前庭にあげて、五月人形のいわれを探っていた。
	企画展 「野鳥展」	62年度（年間）	羽村町在住の岡薫高氏寄贈のハチクマ・オオタカ・チョウゲンボウなど26種の野鳥のはく製を展示。
	体験学習 「蚕の飼育」	6. 25～7. 19	養蚕日本一にもなった羽村。養蚕業をどのように営んできたのかを身近かに感じとってもらうために蚕を館内の養蚕コーナーの前で実際に飼って、これを展示した。
	企画展 「まゆ玉飾り」	1月9日 (展示は1月17 日まで)	羽村で昔から年中行事の一つとして行われてきた「まゆ玉飾り」を参加者と共に作り、講演を行う。作った「まゆ玉飾り」を館内と旧下田家住宅に展示した。
東村山市立郷土館	企画展 「絵馬展」	3. 5～3. 27	日常生活ときってもきりはなせない庶民の願いを描いた絵馬を、町内の神社、寺から借用し、展示を行った。
	こどもの遊び展	62. 4～	昔から伝わっていた歌でわらべを地方色豊かに表現した遊びの道具を展示。単純素朴なものから懐かしさを思い学ばせる“手づくりの味”を展示。
	農業のくらし展	62. 4～	当地は古くから農業を中心に発展した町で、生業の中で欠かすことのできない道具類などを所狭しと展示、土と汗とで生活した農道具、民具、儀礼用具等を陳列し、何時でも直接目にふれ、わかりやすく説明も加えてある。
	郷土のきもの展	3. 17～4. 12	むかしから衣食住は人々が生活するうえで欠かせないものとされていますが、生活様式のなかでも、「衣」に焦点をあてて展示いたしました。先人が汗水を流して野良仕事を行ない、家の中でも家事に専念した生活のようすを象徴した。
府中市郷土の森	常設展 「府中の自然と歴史」	62. 4～	府中市郷土の森の開設にあたり、博物館本館の常設展示室で府中の自然と歴史に関して、8つのコーナーとVTR及びQ&A映像機器により展示構成した。(展示コーナーのテーマ/①府中のおいたち ②土の中の文化 ③国府とその時代 ④中世の府中 ⑤府中の生業と年中行事 ⑥宿場、街道の町一府中 ⑦近代から現代へ ⑧府中の自然と生物)
	開設記念特別展 「美術にみる梅」	4. 4～5. 5	市の花“梅”に因んで、全国の著名博物館・美術館及び日博協の協力を得て、天神様関係、絵画、版画、墨跡、金工、陶磁器、染織の部門の美術品64点により開館記念特別展を構成した。
	特別展 「富本憲吉展—白磁と文様」	9. 22～10. 18	“模様から模様をつくらず”の精神を掲げて伝統的作風を乗り越えた陶工・富本憲吉(人間国宝)の未公開資料を含む63点の作品により展示構成した。
	市民芸術文化祭参加 「刀剣展」	11. 6～11. 8	文化団体愛刀会主催の刀剣武具等の展示。
	第一回梅まつり 「梅あらかると展」	2. 2～3. 6	第1回郷土の森梅まつりのイベントの一環として開催した。(内容/梅切手展、天神様人形展、梅写真展、全国梅まつりポスター展、梅関係図書の紹介コーナー)
	特別展 「白亜紀展—恐竜絶滅と隕石衝突の影響」	3. 20～5. 8	地球46億年の歴史の中で、1億年以上にわたって繁栄を極めた恐竜が大量絶滅した。この謎に迫る諸説の中、隕石衝突説に焦点を絞って恐竜骨格標本や隕石など約60点より展示構成した。あわせてプラネタリウムの一般投影番組も同じテーマで制作して相

福生市郷土資料室	市内のトンボ	7. 1～9. 30	乗効果を高める一環とした。(郷土の森開設1周年記念特別展として開催) トンボの幼虫と成虫33種の標本を展示。昭和59年から60年まで2年間にわたって実施した水生生物調査(市文化財総合調査)の成果を展示。
	森田文庫書籍展	10. 1～1. 30	江戸時代から明治期の書籍(和書)6百点余を10月中は教育、11月～12月は俳諧、1月は詩歌の順に展示(市内の森田家旧蔵<市へ寄贈された>の和書を中心とした文芸資料を森田文庫と総称)。併せて『森田文庫所蔵資料目録』(市文化財総合調査報告書第20集)を刊行。
	詩人大沼枕山の世界	2. 3～3. 30	19世紀後半の詩壇の盟主であり、多摩地域にも門人を多く抱えた大沼枕山にあてられた書簡140点余を展示(60年に開催した『俳人友昇をめぐる人々』を継続したもの)。併せて『大沼枕山来簡集』を刊行。
町田市立博物館	常設展・福生の成り立ちと人びとの歩み	4. 1～3. 30	福生市を中心とした多摩川上・中流域の歴史、民俗、自然資料を展示。
	出土品にみる町田の昔	4. 1～8. 30	最近発掘された資料を中心に、縄文時代から中土までの出土品を展示。
	伝統工芸 日本刺繍の現在 平野利太郎の世界	9. 8～10. 18	伝統工芸、日本刺繍について、斯界の第一人者である市内野津田町在住の平野利太郎氏の作品を展示。
	明治印判手の磁器	10. 27～1. 17	市内野津田町在住の岩崎安吉氏が、多年にわたって収集された明治印判手の焼物583種類1387点を市立博物館に寄贈され、これを記念して展示。
	民具と生活 武相の雲版	1. 26～4. 10 1. 26～2. 28	昭和30年代まで市域で使われた民具を展示。 雲版は、禅宗寺院で合図のために用いられた仏具で、武相地域(埼玉、東京、神奈川)の雲版を展示。
瑞穂町郷土資料館	失われゆく焼物	3. 8～4. 10	焼物の形態には様々なものがありますが、今回は形のおもしろさに注目し、行平鍋、焙烙などを展示。
	瑞穂のまつり	62. 11～63. 10	町内のみこし、山車の写真展示と神楽の面等の展示。山車については特に彫刻に重点をおき、お面については古事記との関連を中心に説明をした。
武蔵村山市立歴史民俗資料館	常設展示「武蔵村山その自然・その歴史・その民俗」	4. 1～3. 31	武蔵村山市の自然、歴史、民俗についてその概要を展示し、来館者のより深い学習の契機となるよう努めている。 昭和63年3月からビデオコーナーに「武蔵村山市の自然」、「武蔵村山市の歴史」の2本のビデオテープを新たに加え、合計10本の郷土史シリーズが揃い、常設展示の充実を図ることができた。
	特別展示「武蔵村山市の絵馬」	7. 19～9. 27	市内の神社、仏閣等に残る絵馬の展示(実物49点、複製11点、写真5点)を通して、文化財に対する理解を深めるとともに、文化財保護意識の高揚に努めた。
	収蔵品展示「押し花」	7. 26～8. 9	館収蔵の自然資料のうち、押し花16点を展示、公開し、自然保護意識の高揚に努めた。
	収蔵品展示「蝶」	8. 16～9. 6	館収蔵の自然資料のうち、蝶の標本39点を展示、公開し、自然保護意識の高揚に努めた。
	作品展示「親子でつくった縄文土器」	9. 13～10. 12	体験教室「親子縄文土器づくり」の様子と製作した縄文土器24点を展示、公開し、資料館の教育普及活動の紹介を図った。
	写真展示「武蔵村山の今昔」	12. 1～12. 26	館収蔵の写真資料のうち、市内の風景の移り変わりがうかがえる写真19点を展示、公開し、市民に資料提供を呼びかけた。